
飴を食べる城

シャー芯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飴を食べる城

【Nコード】

N2298K

【作者名】

シャー芯

【あらすじ】

特に目立つところも、心地よさも無い町。そこにふらりといつの間にか男がやってきた――。「飴を食べる城という話です。聞いたことあるでしょうか。無ければ、ぜひ、お聞きください」……“私”という存在、叔母と町の秘密とは……。

「まちとおはなし」

「こんな話は聞いたこと、あるでしょうか」

特に目立つところも、心地よさも無いだろうに……。この町には。

「飴を食べる城という話です。聞いたことあるでしょうか。」

無ければ、ぜひ、お聞きください」

男は突然、この町にふらりとやってきた。そして一日中、町広場に居座り、語り続ける。

「こんな話は聞いたこと、あるでしょうか」

いや、訂正しよう。一日中、町広場に居座り、呼び続けるのだ。「飴を食べる城という話です。聞いたことあるでしょうか。」

無ければ、ぜひ、お聞きください」

もう幾度日が暮れ、昇ったことだろう。男は懲りずに、繰り返し呼び続ける。

その様子を、私は自室の窓から睨めっこしているのだ。

「こんな話は聞いたこと、あるでしょうか」

町の人は、なにか忙しそうに行ったりきたり。男の呼びかけになど、少しも耳を貸そうとしません。それどころか、まるで、男が見えていない、存在自体気付いていない様にも見えて仕方が無いのです。

「飴を食べる城という話です……」

澄んだ声。ボロ布を頭からすっぽり被っているため、どんな風貌か分からないが、私は好青年なのだろうな、と夢見がちに想像した。

私は原因不明の病持ちで、外に出ることが出来ず、ずっとベッドの上。本を読むか、編み物をするか……。出来ることは限られていた。

……飴を食べる城、か……。

男は、一睡の休みも取らず、この町にふらりとやってきたその日からずっと語り続けている。夜も、昼も。雨の日も、晴れの日も。

町の人々は、気にならないのだろうか？

ずっと語り続けるこの男を。

「どうしたの？ 何みているの」

「あ、あの、いえ」

私のベッドの側に、いつの間にか祖母が腰をかけていた。突然だったので、私はあっけにとられ、気の無い返事をしてしまった。

「窓のそとに何かあるのかしら」

そう言い、祖母はにっこりと微笑む。暖かい笑顔だ。私も微笑み返す。

「おばあちゃん、広場にいる男の話はご存知？」

叔母は目を丸くして、何度か瞬きをしたあと、首を横に振った。

「……いいえ、知らないねえ。どんな話なんだい」

「話は、知りません。けど、題名は飴を食べる城、というらしいの」

「まあ、可愛いお城なのね」

ふふっと、小さく声を出して笑う祖母。私は、その笑いが不自然に思えた。根拠はない。だが、不自然に思えてならないのだ。

「さて、そろそろお昼ね。食事の支度しなくちゃね」

祖母はそう言い残し、私の部屋から出ていった。

「待って、お願いがあります」

すでに閉ざされたドアに向かって、ありったけの力を込めて叫ぶように呼びかける。

「広場にいる男を連れてきて欲しいのです」

きりきりと甲高い声が家中に響き、共鳴する。祖母の返事はな

い。家は静寂を完全に我が物としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298k/>

飴を食べる城

2010年10月21日20時46分発行